

# 不足税 (癡人の一部)

委員 虚彦

潤吉はノートや教科書を風呂敷に包むとづき、割れるように痛む頭を垂れたまゝ廊下に出た。南側の硝子窓からは温かい午後の陽が斜にさし込んで無数の塵埃が黄色い光の中に盛に飛びまはつてゐた。二三歩行つて彼は何か置き忘れてもしたような何とも知れぬ不安な感じに襲はれて教室に後歸りした。そして自分の机の中や机の下を詳細に索した結果何をも置き忘れて居なかつたといふ結論に到達したとき彼は安心したように微笑みながら再び廊下に出た。しかし今度も彼は二三歩行くや否や急に後歸りした。それは教室に歸るためではなかつたけれど向ふからやつて來ると云ふ男を避けるためであつた。彼は一月ばかり以前にSから屢ば縣人會の會費の催促を受けたことがあつた。その都度直ぐ出すように云つて置いたけれど實を云へばひと月後の今日になつても未だ拂つて居なかつた。それでこの度の出會といふものはどうしてもSからの催促かこちらから遲滞の謝罪をなすべき機會でなければならなかつた。

潤吉は躊躇した。Sはほんとうに温良しい男であるから決してさう五月蠅く催促しないといふ推斷が反つて潤吉をまどはした。彼は此處で知らぬ振をしてひき返す事は確かに卑怯だと自分ながら思つた。そして何事にも敏感なSは何とも云はないにしろ屹度潤吉がSを避けたんだと感づくに違ひないと氣づかないでもなかつたけれど突嗟の場合彼にはどうもこれより外に採るべき手段が思ひ浮ばなかつた。遲怠の謝罪をするといふ事は彼の感情に對して當然拂はるべく義務づけられた命數ではあるけれど彼はさう思ひ切つて行るには餘

りた面の反りすかつた。

潤吉はむしやくしやくした氣分に閉されて反對の側の梯子段を降りかけた。彼のズボンは慘ましくも膝のあたりからめちやくに破れてズボン下さへ穿かぬ寒さうな膝頭は赤く覗き出して居た。その上まう吹く風さへ身に滲みて膚寒い頃であるのに上着の腋の下や靴の底なども鱧の喰ひかけの様に破れて仕舞つて居た。

潤吉はこんな自分の身のまはりの事までも考ると殊更に重くるしい頭は破裂しさうに痛み出すのであつた。彼はさうさう急いで梯子段を降り盡した。そして明るい日光の中に砂利道に昇降口から重く飛び降りた。

『あ痛つ！』

その瞬間彼は叫んで砂利道にぐつたり坐つた。そして破れた靴裏から足の腹を覗いて見た。すると黒くよごれた足裏からは赤黒いねばねばした血が流れ出て居た。潤吉は早速靴を脱いでポケットから紙を取り出すと痛いのをじつとこらわて血を拭いた。足裏には大きな硝子破片が二つまでも意地悪く突き立つて居た。拭いてもく血は流れて出た。

『どうした？』

さう云ひながら丁度其時潤吉の側にかけよつた男があつた。それは云ふまでもなく反對の昇降口から降りた友人のSであつた。

『なに、ちよつと足を怪我したんだよ』

潤吉は痛いのをこらわて何氣なくさう答へたけれど彼はいつになく内心動搖して居た。彼はこの場合Sに何と云つて好いやら途方に暮れて顔を赤くした。

『だいぶ切つてるぢやないか。結いへとかにやいけないよ』

Sは親切にもこう云ひながら手拭を半分こんがらに裂いて潤吉の足を縛くわりしてやるのであつた。潤吉の頭には入るべく餘りに多い種々の考へが色々こんがらと葛藤こんがらつてSの親切を感じる言葉さへ口に出なかつた。潤吉は唯ただぼんやりと彼に縛くわりしてやるSの横顔を靜かに見守つて居た。

『有難う！』

潤吉はこの手厚いSの慰撫に對して彼の手をとりながら聲を絞しぼつて感謝したいと思つたけれど何と何とはなしにこみ上げて來る切きない哀愁に女によく見られる泣き出し度いような感情の高潮に達して云つた。Sはしばらく色々の話をした後用事があるといふので運動場を横よこぎつて急いで歸つて行つた。潤吉は再びたゞ「有難う！」と云つて何とも知れぬ不思議な壓迫を感じつゝSの姿が門の影にかくれるまで涙ぐんだ眼で凝じ乎つと見送つて居た。

『一体自分はどうしよう云ふのだらう』

潤吉は漸く立ち上て運動場の芝原の方へ行つたが斷續的に刺すように痛む足裏の疼痛にたへ得で甘歩も行かない前に松林の中に腰を下した。そして放課後の學校の何となく物足りぬ程ガランとした死の様に冷い沈黙の中に谿間の草原に咲いた一輪の百合の寂しさを味ひつゝ彼自身の悔恨と激情に満ちて朝露にぬれそばつた様に冷々切つた肉體を注意深く眺めて見た。破れた靴と破れた洋服とそれに毎朝登校の際皮肉にも床屋の鏡に寫される青ぶくれたいやな自分の容貌を繼ぎ合せると潤吉は慄然ぞつとする程不愉快であつた。

『洋服も靴もどうかしなければならぬ。それからあの會費、それからもう一つ』

親——本能の性の衝動——この三つが大きな渦になつて奔流の勢で回り始めた。彼の頭の中には——金——貧しい親

潤吉は實際今金が欲しかった。その欲望が増大すればする程悲しいのは獨り寂しく故郷を離れての赤貧生活の苦痛であつた。然し潤吉は強てこのうら若い赤貧生活の苦痛を文字通りに經驗しなければならぬ運命を避けたいと思ふのであつた。すると彼は直ちに年老いた今日までも瘠我慢で殘酷な程の薄給のために朝早くから夜おそくまで眞黒になつて働いて居る不幸の父親の運命を思ひ浮べたのであつた。そして悄然として稚や穉の木の繁みの暗い背戸裏から家に歸つて行く父親の影像を目のあたりに思ひ浮べた時、澤山の小供——弟達や妹達——を相手に手は皺だらけにして水仕事をして居る母親の幻影が浮び出た時彼は自分自身を極度に嘲りながら結局自分の生活の苦痛を快く否定せずには居なかつた。潤吉のこの時の悔恨はも早や取り止めもつかぬ激情であつた。運命づけられた苦痛をのがれて貧乏者に不相應な真似をしようにとする欲望はそれと氣が附いたとき彼自身の肉の一片を切り裂いて溝の中に投げ棄てたいような激しい自責の念となつて彼潤吉を汗しつぱりにしたのを潤吉は否定する譯に行かなかつた。

『阿父さん！阿母さん！どうか許して下さい』

潤吉はもう人知れず泣いて居た。而も丁度この此時潤吉の胸にひらめいた或物があつた。それは何物かを求めんとする強烈な発作であつた。風に煽られた山火事の様に猛烈な勢で燃へひろがる強い打消し難い醜い衝動であつた。潤吉が心の底には遣瀨ない悶々の情が燃えて居た。彼はこんな事をさへ考へざるを得なかつた。

天は彼に物質的の餘裕を賦しなかつた。そして物質的にその慾求を満し得ない悲哀は充分飽き足る程經驗させられた。而も天は彼に精神的の満足をだに與へまいとするのだらうか。噫金がなければ戀する價値に無いのだらうか！

こんな事を考へて居る矢先不圖潤吉の前に浮んだ影像があつた。地の心から湧き出た清水の私語のように天翔る天女のメロディアスな音楽のように澄んだ聲で、

『あなたはまだ迷つて居られます。あなたは何を求めようとなさるんです？ 少なくともあなたは妾を棄て、何事を企らんで居らつしやるんです？ 私の愛は永劫です。不變です。あの星の光のように永劫で不變なのです。妾はあなたがこの暗い慘めな惡夢からお醒めになるのを待ちませう。それがあなたの肉の壞滅の日であらうともあなたの覺醒の日を待ちませう。どうかこれ丈はどう云ふ事があつても忘れないで下さい』

と云ふのであつた。それは潤吉の十年前の幼い追憶に常に絶對のクインである一人の少女であつた。潤吉はまた十年前の慘ましい追憶の跡をたどらねばならぬ悲しい運命を避けたために立上つて歸らうと決心した。彼はこの追憶の綾糸をたどることが余りに彼を極みなき哀愁に沈ましめるといふ事をよく知り過ぎて居た。短い晩秋の日は残り少なくなつて西山に沈みかけた夕陽の赤い光が冷たい西風に騒々しく波形に搖れる松葉の繁みを通してさなきだに赤い幹を燃ゆるような赤色に彩つた。潤吉は痛い足をひきづりながら漸く門を出たが下宿に歸りつくまで無意識の中に幼い而も哀愁をそよる追憶をいつもやる最も親しい方法で一事も残さず詳細に繰り返して深い深い哀愁の谷に下りつゝあつた。彼は色々を避くべき手段を講じたけれどどうして

もこの慘ましい追憶のヒロインを異物な事は出来なかつた。

それは運動場の隅々に咲きはこつた櫻が風もないのにほろ／＼と散りゆく頃であつた。男女の生徒をうちま  
せて三十四五人に成立つた尋常三年の教室でも二つ腰かけの附いた机に男女の生徒がならんだ。潤吉がなら  
んだ女生徒は女生徒の中で一番よく出来る惻愾な眸の美しく澄み切つた可愛い少女で大きな呉服問屋の娘で  
あつた。

手習ひの時間などは二人で墨の換つこをしたも筆をとりかへて書いて見たりするの癖のやうになつて居た  
のでいつものやうに二人で取り換つこして、ごじ／＼泥のような墨を氣根強く磨つて居た。どいつになく彼  
女が覗き見るように意味あり氣な視線を注いでは外らし外らしては注いで終には潤吉の視線と丁度一致する  
までも潤吉を凝視して居た。潤吉はどうも少し變な氣持ちにならずに居られなかつた。それで潤吉も問ひ返  
す様な目で彼女を凝視した。すると彼女は始めて安心したやうになつ、こり唇を浮べて微笑みながら小さな聲  
で「津村さあん」

と潤吉の名字を呼ぶのであつた。

『なあに』

と潤吉はやつぱり低い聲で不思議さうに彼女の顔を覗き込んだ。

『あ——のね。あなたのした、が、きを一枚下さらない？ すつかも忘れて了ひましたから。ね。今日——お清書で  
せう』

彼女は潤吉の數枚重ねた下書きを見て顔を赤くしながら氣の毒さうに云つた。潤吉はどうしようかと思はし  
躊躇した。しかしすぐ一枚の下書きをとつてそつと彼女の手に渡したのである。慄然として潤吉は先生の顔

を見上げた。幸な事には先生は朱筆を握つたまゝ下を鞠いて居られたので潤吉はほつと安心して彼女の顔を見送つた。彼女は頬を赤らめて『すみません』と眼で云つた。總ては障害なくそれまで進行したのであつた。其の次の手習ひの時間に兩人共「甲の上」と採點された二枚の清書を取り換へて喜んだ。しかし慘ましい事にその悦びは一瞬間の後には儚なくも滅茶く〜に破壊さるべき運命に落ちて居たのであつた。

仲の好い兩人は授業がすむと一所に戯れながら運動場に出た。潤吉は彼女の心からうれしさうな顔を見ると小さい胸に包み切れない程の誇りを覺わずには居られなかつた。

突然潤吉は脊から冷水でもあびせられた様にぞつとした。彼の前には教室で最も腕白で力の強いと総てから認められて居る小供が七八人クラスメイトと一所に目をむいて突つ立つて居たのである。

彼等は口々に泡を飛ばしながら二人を罵つた。そして潤吉がどうして前の手習ひの時間の出来事が彼等に曝露せられたかを不思議がる暇もなく惶しく礫は兩人に投げつけられた。いつも窘められる時は萬能の裁判者である先生にも誰にも告ぐべく潤吉は餘り多くの弱味を持つて居た。潤吉はひゞく悲しくなつて來た。そして兩の眼からはわけなく熱い涙がこぼれた。勝ちほこつた少年の群は一時にぞつと叫きたた。すると運動場で遊んで居た男生徒も女生徒も兩人の回りにおしよせて兩人を等しく嘲笑の的と爲てしまつた。潤吉は急に恥しくなつて來た。そして集り來つた群集の中に家の近所の友達が混つて居る事に氣附いたとき見られてならぬ犯罪を盗み視られたように彼は彼女も振り返らずに轟然に植物園の植込みに驅け込んだ。而も後ろから嘲笑と輕蔑の視線をあびながら。そこには倚麗に青々と天鵝絨の褥のような芝生が生へて密生した檜が暗

く陰影を作つて居た。

潤吉の目には涙もなく新しい涙が涌いて出て何時止まることも思はれなかつた。唯くやしさに獻り上げて頭はガン／＼鳴り初めた。と涙を透して茫乎と彼の眼前に浮び出たものがあつた。よく見れば紅い袴なのだ。尙よく見れば彼女と判つた。ハンケチを眼にあて、しく／＼泣いて居るのであつた。

しかし十分の休みは容赦なく終りをつけて始まりの鐘がなつた。潤吉は教室には入るのがきまり、悪くて仕様が無かつたけれどどうどう全生徒の嘲笑の中に彼女とならぶべく餘義なくされて了つた。彼女も潤吉も皆の嘲弄的の視線を避ける爲には下を向かねばならなかつた。

この事があつて以來兩人はいつしか皆からのけものにされて了つた。誰一人として腕白大将の威力に服従して居ない者はなく徒らに意地悪るさうな視線を兩人に送るばかりであつた。兩人は仕方なしに歡樂の盡せぬ運動場を見棄て、裏庭の植物園や櫻の若葉の影にたゞすむ事が多かつた。

そうした外部の壓迫は生れ付き内氣で陰鬱であつた潤吉を尙一層内氣に冥想を好む人間に拵へ上げたのである。彼は強いて頭をさげてまでも教室の少年の群に混つて遊ばうと思はなかつた。寧ろ其等の喧ましい亂暴な子供をこちらから厭ふようになつた。これからと云ふものは彼は日に日により沈鬱によりメランコリな性質になつて行くように導かれたのである。と同時に共に孤獨であるムードの好く似た潤吉と彼女とはほんどに仲よくなつたのであつた。

いつの間にか春の女神は羽音もたてずに南の國に飛び去つた。そして新緑の薫は壓へつけるように芳烈に鼻感を襲つた。明るい／＼初夏の太陽が眼の底を刺すような強烈な光を濃厚な色彩の萬物に投げたかと思ふと潤吉の受けた深い創痕の未だ癒ぬ間にどう／＼梅雨期に入つた。潤吉は彌益しに暗い冷い而して灰色の氣

分に閉ざれ行く自分自身を凝乎と見守つて居た。

或る朝の事であつた。横なぐりにしぶきつける豪雨を冒して潤吉はやつこの事で登校した。が彼女の姿は授業が始まつても彼の隣席に見受けられなかつた。彼は何となく非常に淋しかつた。しかしその淋しい氣分の中にも二時間目になつたら來るだらう三時間目になつたら來るかも知れないと云ふ確ない一縷の望みに遣瀧ない心を震はせて十分の休みにも教室の窓から雨にかすんだ本門を見送つて今にも小さな蛇目の傘がころび込むやうには入つて來るのを待つて居た。けれども彼女はとうとうその日は學校に姿を見せなかつた。潤吉はどうしても耐は切れない程うら寂しかつた。そして若しや學校に來る途中橋でも墜落ちたのではあるまいかなど幼い頭に色々と幼稚な想像を廻らして見た。しかし悲しい事にはこんな潤吉の小さな胸を悶ました日が二週間程も續いた。

學校では面と面とを突き合せて居ても相變らず潤吉と話す小供もなしと云つてこちらから求めて仲間に入るなどと少なくとも小さい自尊心の幾分かを傷つける方法は幼い潤吉でも探らうと欲しなかつた。唯自分自身のみに限られた短い思索の色糸を想像と瞑想とで無限の長さに延長しながら彼女が居る時に於てのみより廣く擴張せらるべき自分の世界のみを靜かに底暗い氣分で見守つた。終始潤吉の腦裏を往來したものは早く彼女が學校に出てくれ、ばい、といふ感情の高調であつた。

連日盆をくつがわすような雨は絶間なく降り續いた。そして用水桶からは始終水が溢れ落ち運動場に溜つた水は非常な勢で門前の溝を流れた。も早や潤吉はほんとに學校での孤獨が苦しい程悶んだ。

潤吉は受持の先生から彼女がひどく病氣であると云ふ事のみ聞かされた。彼は彼の豫期が事實と一致した

時その豫則が事實と一致すべく確信して居つたに、はらす非常に驚かざるを得なかつた。でも彼にはとうもこちらから進んで見舞に行くだけの勇氣さへ欠けて居た。彼は今更のように彼自身の弱々しさを哀しいものに思つた。

雨はやつぱり降りつゝいた。青葉嫩葉を敲く雨の音は田圃から喧ましく聞けて来る蛙のだらしない鳴聲と纏れ合つた。潤吉の失望はも早ややるせない苛立たしさと變化して了つた。

それもやつぱり雨の日であつた。潤吉はいつもの様に番傘さして袴を高くからげてひとり運動場の水溜りをざぶざぶ、混ぜ返しながら門を出やうとしたのであつた。すると門際の櫻の木の下に蛇目傘さして立つて居た年増の小母さんが潤吉に言葉をかけるので彼は驚いて立止まつた。

『津村さん。津村の坊つちやん』

潤吉は驚いて了つた。それは一面識もない全で顔を見た事の無い小母さんであつた。しかしその小母さんは潤吉の顔を見るとちよつと微笑みながら言葉を繼いだ。その微笑も何やら言葉をかける手段として用ひられた理由もない微笑だとは氣附く筈もなく潤吉は恥しさうに下を向いた。

『あなた津村さんですね』と再度念を押して小母さんは自分は彼女の家から使に來たその事や彼の女が非常に待つて居る事などをくたくたくと話して迎ひに來たから來て下されと云ふ意を告げた。潤吉は唯無上にうれしくて仕様がなかつた。

潤吉は何等の願慮もなく前に待たしてあつた俥にその小母さんと一所に乗り込んだ。俥はバラ／＼とほるに雨の音をたてながら雨に閉ぢられた眞晝の街をかけて行つた。潤吉は汗しつぱりになつてもまだ意地悪く沈

黙を破らなかつた。しかし小母さんもやはり話し掛けなかつた。

もう随分驅つたなと子供心に思つた頃彼は俣が鋪石か何かの上に乗つたように氣持ち好いシヨックを感じた。同時に俣はびたりと止つた。

俣は棕櫚や檜などの植込みの繁みの鋪石の上に留つて居た。潤吉の目の前には美しく拭きつけられた格子戸が目も眩むような美人畫の突出ついでをすかして見せて居た。つれの小母さんに導かれて格子戸を潜つた彼はすぐ若い女中に案内された。廊下の兩側は竹や棕櫚などの美しい植込みでその向側の乳色の硝子戸の中からは算盤のかけ聲が聞けて居た。潤吉はこんな美しい大きな家に澤山の女から侍られて暮して居る彼女はどんなに幸福だらうと思つた事だつたらう。

潤吉の小さな頭に狭くるしい藁屋根の陋屋に殆んど田舎らしくその日／＼を消して行く一家の有様が浮ぶ時間があるか無しに彼は離れの座敷に導かれて居た。彼の目の前には眞白な敷布シイフの上に水色地に淡紅色ゴキイロで幾重となく交錯した秋櫻のやがては降り灑ぐ小雨に散り果つべき日も知らざるごとく晴れやかに染めぬいた美しい夜着の袖から覗き出した眞白な腕と發熱のために赤くほてつた林檎のような頬の上にも憂氣につぶられた目が悲しいベッドの一日を怨むように浮き彫りのように見られた。潤吉はベッドの傍によりそふて開かれた障子に疲れた視線を送つた品の好い婦人に丁寧にお辭儀した。彼女の阿母さんである。潤吉はいつもこんな場合によく起る彼の不注意を恐れるかのように使ひなれた沈黙といふ庇護者にたよつた。

しかし冷した麥湯や菓子や寫眞帳が彼の前にならべられた時彼は全くどうしたらよいか途方に暮れた。そして先づ第一は潤吉が望んだ事は彼女が一分間でもはやく眼をさましてくれ、は好いといふ願望ガハシであつた。

潤吉は丁度靴を脱いだ小羊かなるのようになつて來た。そして何のためかどうしてこの家へ來たか云ふ事がまるで夢の跡を辿つて的もなくなき迷ふように不安になつて了つた。けれども彼女はこの時の彼によつては意地悪いと思はるゝ程めざめなかつた。

彼女の阿母さんは連日の看病に充血した眼をしばたかして菓子すゝめたり寫眞帳の説明をしたりしたけれど潤吉はどうしてもそんな事を落着いて受け入れらるべき頭を今の場合持たなかつた。そして彼は彼の自我を押してほして重い沈黙を破らなかつた。交互に綺麗な夜着の間から覗き出した纖弱さうな純白な腕と時々痙攣的に微動する赤い頬を見守つて居た。と突然あの黒い大きな眼がぱつちり開いた。潤吉は偶然にしかも唐突に起つたこの動作に少しの豫覺の無かつた驚きをかくす爲めに目を開かれた寫眞帳の上に落した。そして彼女がさうすれば屹度やさしい聲で『津村さあん』といつものように呼びかけてくれるであらうと云ふ安全な回避の方法をとつたのであつた。彼の目前には五月の闇に飛び交ふ螢のように眞黒い大きな眸の幻像が行來して居た。而もその大きな眸が今自分のくるぶきになつた首筋あたりを注視して居るならば自分が眸をあげさへすれば必ず自分の視線と彼女の夫れとが合致するに違ひないといふ打算が潤吉の感性を非常に高潮せしめた。阿母さんの呼びかけに返事しなかつた彼女に驚かされた潤吉はおづく、瞳をあげて見た。彼は驚かずに居られなかつた。彼女のたつた今開かれた瞳はこの一瞬間の中にもこのように固く閉ぢられて一條の涙痕が赤い頬に浮彫りされて居たではないか。潤吉は今更の様に自分の弱々しさとその一瞬間に起つた卑怯な回避の方法を生み出した頭の鈍さ加減を呪はずには居られなかつた。

いつまで経つても一度閉ぢられた眼はあだかも秘密殿堂の鐵の扉のように多くの秘密と奇蹟とを曝露すべく

鐵の扉を紛粹する勇者を待つもの、ように開かれなかつた。阿母さんの呼びかけも看護婦の慰藉も無駄でた、赤い頬の筋肉が呪の池の漣の様に靜かに而も急に微搖した。その苦しうな吐息は尙も哀愁をそゝる誘因となつた。

間もなく室内には電氣が點いて外面の植込みの雨の私語は薄明の靜謐に哀しい旋律を流した。

潤吉はもうとてもたまらなくなつたので靜かに「歸り度い」と云ふ旨を彼女の阿母さんに告げた。そして自分の意志をどうとう曲げて

『さようなら——もう歸ります。絹子さん』

と藥臭いベッドに近よつて熱にほてつた顔を覗き込んだ。と涙に濕つた睫が開くともなく急に開かれて寸度うれしうな表情をすると惶しく再び閉ぢられた。潤吉はひどく物足りない憾をのこして

『さようなら』

と云ひ残したまゝ座を立つた。そして云ひ知れぬ失望の念に彼女をも、一度見返す勇氣もなく挨拶を後から浴びつゝ急いで廊下に出て了つた。

しかし其後の潤吉は一時間程前その部屋に入る時の彼とよほ異つた心理状態にある小供であつた。その時その瞬間、永遠に癒やす事の出来ない心の創痕は慘ましくも色々と纏れ合つた悲しい思索によつて胚胎せられ溢觴せられたのであつた。

あの黒つばい大きな眸。潤吉はどうしてもそれを記憶の碑銘から除去する事が出来ないばかりでなく瑕瑾なく成長した自負の觀念に少なからぬ傷手を負はされたのである。潤吉はどうしても自分自身の仕討を肯定す

る事が不可能であつた。

潤吉は再び俾長のせぢれた。彼は今迄何ともつがぬ壓迫に苦しんだ自分を再び曇るしいほろの中にも小さく踏踏せたくまらせねばならぬのが自分の自由を束縛するたへ難い桎梏の囚になつたように思つたが、またこの雨の街を車夫が挽けるだけ何時までも挽かせて廻り度い様なかなしい気分になつた。

彼が家に歸り着いた時はもう潤葉樹の繁みの生へかぶさつた彼の家には淋しさうに暗いランプが開かれた障子の間にたゞすんで何か考へて居る母の姿をうすぐらく照らしてゐる頃であつた。潤吉は歸るよりも早く神經質な母を見るのが何よりも苦悶の種であつた。

この小さな悲劇の印象は次の事件によつて愈よ深刻に潤吉の胸に彫み附けられた。

外でもない。血も黒ずむような雨は尙一層降りつゝいた。その翌日であつた。潤吉は彼が最も恐れ且つ最も無からん事を望んだ報告を受持の教師から聞かされた。

彼女は潤吉が訪ねて行つた其晚猛烈な發熱と多量の咯血のために憐なくもこの世の光も十年を名残りにみ空の星の一つに歸つて了つたのであつた。潤吉は全身電氣にでも打たれたように硬ばつて知らず／＼涙が兩の頬を瀧のやうに流れるのだつた。

あの赤い頬。黒みの勝つた濕つたぼい眸。纖弱さうに白い腕。ほうせんくわで赤く染めた爪！噫其等の総てが魔の住むようにどす黒い森の中の火葬場の一片の煙と消えなければならぬのだらうか。あの腫もあの腕もまだあの真白いシイツの上に凝乎じつぷと動かすに美しく横つて居るのではあるまいか。死んだなんて眞實の筈がない。嘘だ。夢だ。潤吉はその小さい胸をこれ程までに張りつめた思ひになやましたことがなかつた。

開くともなしに開かれたあの瞳。それはも早やはかなくも光を失つてゐるのだ。淋しいのは自分獨りだ。にくまれ兒は自分獨りなのだ。潤吉はこう思ふとひた狂ひに泣かずに居られなかつた。そしてそれからほんちに文字通りのひと、ぼつちになつて了つた。小雨に濡れそぼつた無花果のような淋しさに熱し切つた自分の頭を胸に沈めて自分自身の外何人の干渉も許さない自由な奔放な世界を喜ぶと同時に人々を回避する瞑想を好んだ偏狭な癡人はこんなにして作り上げられたんだ。

しかし十分の休み毎の花園の逍遙や運動場裏の植込みの靜謐は大自然の秘密殿堂にかくされた神秘な力を必然に展開する幽玄な泉のように犇々と無數の哀話を彼の頭に注いだに違ひない。反對に過去の追憶から來る哀ましい烙印をより深くより鋭く彼の心に焼きつけたのもそれ等のものであつた。

軟かい皮膚をきづつつけた創痕は月日と共に次第に擴張し増大して骨ばつた手の甲の血管の一つ一つにまでもその疵によつて趾つけられた黒血の塊がおしつまるように思はれる。結局、悲しい時にいつも現はれて潤吉を泣かしたのは痛ましい追憶の白金の扉を開閉した美はしい頬のピンク色と黒い濕つばい瞳の幻影であつた。

下宿に歸つてからも潤吉は容易に落着かなかつた。はからずも運命附けられたまゝに開かれた悲哀殿堂の白金の扉は又しもより深い悲哀の穴倉に彼を導いたのであつた。そして夫れは色々の悲哀に満ちた感情と葛藤して一生懸命に走り續けた揚句固い煉瓦塀に頭を擲りつけて血塗れになつた儘斃れて了ひたいよ、うな青立たしきを生んだ。

彼は獨り凝して暗い悲惨な過去を顧みみた。そして又恐怖と戦慄に満ちた未來を想像した。しかし彼の現在の能力の燈火は惨ましい過去を批判すべく、又その灯を提げて疑懼多い未來に突き進むべく餘りに貧弱であつた。

潤吉は彼自身に彼の覺醒に對する要求を肯定せなければならなかつた。未來に對して彼の肉の減ぶまでも續くべき努力を要求しなければならなかつた。それはどうしても悲しい潤吉自身を平凡ながら最もよく満足せしむるものに外ならなかつたから。

彼は夕飯をすました後泣きさうな顔をさげて下宿をとび出した膚寒い晩秋の闇は彼の總ての悔恨と自責とを許容するように廣く暗く神秘に續いてゐた。

潤吉はどこまでもこうしてとぼいと歩き續けたいよふな氣がした。そして不圖我に飯つて明るい騒々しい活動寫眞館の前に来て居るのを意識すると耐に切れない内心の悲哀の激情を忘れるためと漸く財布の底に残つてゐる十錢の銀貨を費はねば満足せられないような變な氣分が原因となつて逃げるように活動寫眞館にとび込んだ。……………

其夜おそく潤吉は故郷の家に宛てた金の催促の手紙を書き了へて失神したように六疊の部屋に泣き伏した。そして呼びさまされた追憶の悲哀と惨めな故郷の家の状態と赤貧の苦痛とに攻められてひた狂ひに狂つた。深更に街の郵便函に投せられた父宛の手紙にはわづか三錢の切手だに貼られて無かつた。不足税と人知れず郵便函の前でつぶやいた潤吉の顔はいつになく青白かつた。